

●司会

それでは第一部のミニセミナーということで入りたいと思います。

本日は私ども CSV 開発機構 上席研究員の近江よりご案内申し上げます。

近江は CSV 技術開発の商品戦略のプランナーまた自治体のグランドデザイン、エネルギービジョンなどに係る事業計画の策定、また、企業の資源化循環型の製品戦略であるとかブランド戦略を始めまして、エネルギー、防災、生物多様性の専門家として、経済、社会、環境のバランスのとれた事業領域、事業計画の支援づくりのお手伝いをさせていただいております。

それでは近江の方からも、簡単なミニレクチャーということですがお話し申し上げますのでよろしくお願いいたします。

●一般社団法人 CSV 開発機構 近江氏

こんにちは。

近江と申します。

埼玉県内の企業の産業競争力向上に、ネイチャーポジティブ経済を役に立てようというテーマをいただきまして張り切って資料を作ってきたんですけど、10 分ぐらいしか時間いただいていないので、明日、皆さんの方にはこの資料をお送りするような形で、読み込んでいただけるように作ってまいりましたので、今日はいつまでお話しを進めさせていただければと思います。

ご存じのように今年の 7 月に、ネイチャーポジティブ経済移行戦略ロードマップとして、環境省の方からロードマップが作成されて発表されました。制度の中身に関しては、皆さん読み込んでいただければというふうに思いますので、我々分科会として、これをどういうふうに役に立てていこうかなということにフォーカスしてお話しを進めていければというふうに思っています。このロードマップの中に、視点というのがある、視点 1、視点 2、視点 3 というふうにポイントがまとめてございますけれども、小さくてちょっとわかりづらいんですけど、1 つは自社の企業価値や地域価値というのを高めていくということに役に立てようと。それから視点の 2 というのが、その効果を科学的に見える化をしていくことによって、可視化を図っていきましょう、それから情報発信につなげていきましょう、それからそれをルールメイキングのところで強みに変えていきましょうというのが、この 2 の部分、データの蓄積を作っていきましょう。視点の 3 で、今申し上げた国際的なルールメイキングのところで強みを発揮していきましょう。日本企業とか、日本の中小企業が持っている技術なんかをどんどん世界に向けて発信していきましょうというようなことが、視点として整理されていると。一方で、ここにもちょっと書きましたけれども、地域の価値とか企業の価値を上げていきましょうという話になってはいるものの、今の政府の動きを見てみると、大企業が勝手にやっているよねというところで、中小企業とか、地方の製造業とかっていうのが一体何をやればいいのかっていうのが、どこから手をつけていいのかいまいちよくわからない。それから、まだね、何かコストをかけてまでそれに取り組むっていうのが、社内にも説明がつかないし、それがいつまでどこまでやればいいのかっていうところが判断しかねるよねっていうようなところが、正直なところだと思うんです。ただ、この評価の枠組み、視点の 2 のところで評価の枠組みがこれから決まっていくなだとすると、ここでね、他のところは大企業がやっとならばいいじゃんっていうのを待ってしまうと多分乗り遅れてしまうんです。これからネイチャーポジティブ経済移行にいろんな国の予算とか、県の予算がついたりとかしてそれを取りに行こうというのが最初の発想だと思うんですけど、それを待っていると、多分乗り遅れちゃうんです。先行者利益を埼玉県がとっていきましょうということを考えるコアメンバーの方がここに集まっていると思いますので、皆さんは県が何か予算組んだらそれを営業として取りに行こうっていうことだけではなくて、今日のこの場をうまく活用して、一緒にむしろ県を引っ張っていく、自治体を引っ張っていく、アイデアを出して行ってそれをどんどんビジネスにしていってという発想で進めていただければいいんじゃないかなというふうに思います。

そういった発想転換が多分、この場を通して、皆さんの中でお持ち帰りいただければいいんじゃないかなというふうに思っていて。よく言われる環境と経済と社会の 3 つの要素がかみ合って世の中が回っていきますというのをレイヤーに分けていくと、それぞれに地域、埼玉であったりとか皆さんの周辺の自治体であったりとか、それから皆さんの会社が持ってるリソース、

経営資源であつたりとかっていう資源を考えていくと、この環境にとってのリソースは生態系とか自然とかで、経済にとっては技術とかエネルギーとか、それからそこに流れていくお金とか、それから社会にとっては人とか街とかコミュニティがリソースになっているということになるかと思うので、そういったものをどういうふうにどこにまわしていくかっていうことを考えるときに、ネイチャーポジティブ経済への移行の発想でもって考えると、自然を守っていく保全していくという考え方と、それから新しく生み出していく、増やしていくという考え方とそれからそれを積極的に生かしていくっていうところが、レイヤーとして出てくると思うんですね。そうなったときに今までは環境保全の枠組みで、この守るっていうところばかりを考えていることが非常に多かったと思うんです。ここから先は皆さんの持っているリソースなどをかけ合わせることで、それを積極的に増やしていったり、活かしていったりっていう領域がたくさんあるよねと。これ1個1個説明していきたいんですけども、今日いらっしゃっている方々は自然共生サイトを新しく作っていききたいとか、それから、皆さんが持っている保全技術とか、新しく生み出してくる修復・回復の技術みたいなものを世の中に発信していきたいとかっていうのを皆さんお持ちだと思うので、そういったものを、どうやってこの全体のレイヤーの中でどのレイヤーに生かしていくかなんていうのが整理できるといいんじゃないかなと。それができると、いわゆるボランティアとしての環境保全のその先に皆さんアクションを起こすことができるようになると思うんですね。おそらく、皆さんの原料のサプライチェーン、どこから原材料を調達しているかっていうようなところをちょっと眺めてあげるだけで、そこをネイチャーポジティブ型の調達に変えていきましようみたいなことができたりとか、それを積極的に一緒にビジネスにして新しい商品開発につなげていこうというようなことができるようになるといいんじゃないかなというふうに思っているところです。

では、そういう発想方法の柱として2つぐらいあるかなというふうに思っていて。1つは、既存の取組を持続可能なものに変えていく、ネイチャーポジティブなものに変えていく。もう1つは、新しく作っていく。それぞれに保全・守るの領域、それから増やすの領域、生かすの領域っていうのが発想として考えられるよねというのがこのステージです。ゆっくり説明したいところですが。

埼玉県、海はないんですけども、埼玉県のこの皆さんの足元には、ものすごく恵まれた水系がめぐらされています。河川だけじゃなくて、ため池なんかも500以上あるはずなんですよ。その水系に恵まれた埼玉県いろんなところで、埼玉リバーサポーターズみたいな形で、水辺を活性化していこうみたいな動きもありますし、埼玉県のみどりのポータルサイトを見ていただくといろんな形でもう既に取り組んでいらっしゃる方々がいっぱいいるんですね。埼玉県環境科学国際センターのカワナナの繁殖飼育実証なんていう科学的なデータを裏付けにしながら、奥武蔵の休暇村のところでホテルの再生プロジェクトやったりとかっていうことが既に起きているので、こういったものに皆さんのリソースがどういうふうに関係合わせられるかなみたいなこととか、そういう発想で最初の第一歩を踏み出してみるっていうのがいいんじゃないかなんていうふうに思っています。

ふやす取り組みとして僕も実は10年以上前になるんですけど、大手町、東京の大手町と神田の間のところに鎌倉橋という橋があるんですが、その橋のたもとに今、政策投資銀行さんとかの大きいビルが建っている横にこういうエコミュージアムというものを作りまして、ここに小岩井農牧さんの屋上緑化の技術で湿性回廊を屋上にあると見えないので公開空地の下のところに持ってきて、ここにこうちょっとしたしつらえをしたんですね。ここにビルの注水を持ってきて、ここでしばらくぬるめた注水をホテルのせせらぎに、ホテルを飼育する流れを作って、ここで実はゲンジボタルの飼育とかを僕がやりました、10年ほど前ですね。最近、東京の緑って少し作られ方が変わってきていることにお気づきの方結構いらっしゃると思うんですけど、その一番最初のあたりですね。単純に植栽を植えて、管理のしやすいものを植えて緑になったねってごまかすような、都市緑化の仕方っていうのがほとんど最近はなくなってきているんじゃないかと思うんです。東京大手町とか丸の内とか、それから竹芝辺りとか、それから四谷あたり、緑の作り方っていうのが大分変わってきているはずですよ。というのは、公開空地とか、街路樹に使う緑を在来種に変えていきましようとか、生物多様性に配慮した形で生物コリドーを構成していくような形で作っていきましようっていうのが、都市計画制度の中にきちんと位置付けられたんですね。ですので、地域に貢献する緑っていう形でそれが自治体に評価されて、

ちょっとですけど、ビルの容積緩和の役に立つんですね。なので、当時私は実は三菱地所というところにおりまして、こんなの作ったら、子供たちがいっぱい来るようになりました。子供たちがそのゲンジボタルの生息地を学んで帰ってくれるっていう、普及啓発の場所にもなったんですね。

ご覧のように、ものすごく明るいですよ。都会なんで。そうするとホテルって光ることで求愛行為、オスとメスが出会うので見えなくなっちゃうんですね。ですので、このビル管理側とケンカしまして、この照明を消してくれと。左右全部消してもらったら、今度人が逆に集まってくるようになったんですよ。そりゃそうですね。なんか光っている、ホテルがいるんじゃないかと。そしたらここにたまたま、この鎌倉橋を挟んだ反対側の神田側の自治会長さんが来て、一緒にホテルを見ながら、今度は鎌倉橋の橋洗い会と一緒にやろうって話になってどんどんコミュニティが広がっていくんですよ。なので、このホテルの養殖をビルのしつらえとして見せて、エコミュージアムみたいな形で子供たちの環境教育のフィールドにするっていうこと自体が、人を集めて賑わいをつくって、そこから新しいコミュニティが生まれてくるっていうことに繋がっていったと。

実は皇居がすぐ横にあって、そこから繋がっているみどりっていうのを街としてまちづくりの中で位置付けて、作っていかないかということをやりました。埼玉県も結構都市部の緑がなくなって、コンクリートの街になっていますけれども、皆さんが持っているちょっとだけ、角っこのところの空地进行をみどりにしてあげると、そこがチョンチョンと生物がたどっていく生存基盤になったりするんですね。ですので、こういうはぐくむ緑というまとまった緑と、それからそれをつなげていくスポットの緑っていうのを全体として面で設計してあげると、単独だとちょっとしか何か役に立ってないねとなるんですけど、面としてそれが生物の生存基盤になっていますっていうことになるようなことができるようになるわけです。そのためには、設計が当然必要になりますし、何がしかのインセンティブになるビジネスモデルが必要になりますし、それをきちんとモニタリングして、データにして、そこにこう渡っていく生存基盤にこれがなっていますよということを明らかにしていかなきゃいけないわけですね。それができると逆にこれをこの緑が役に立っているねっていう評価することにつながるっていくので、それが基準になって、次のアクションにつながるということになりますので、そういった機能が街の中に埋まっていくと、この資産価値というのも上がっていくというふうにデベロッパーさんたちも考えてこれをまちづくりの中に位置付けてやっていこうっていうふうになったわけです。実際にやはり緑がたくさんあるというところは、海外のオーナーさんたちからも評価されて、床の値段を上げることに繋がっているということなんですね。

いっぱい資料用意してきたので、明日配られるそうなので見ていただければと思うんですけど、こんなふうに、ホテルの養殖も頑張りましたというやつです。

それから、そういった形で自然の資源を、どういうふうに役に立てていけばいいかっていうような事例をいくつか、木質バイオマスでしいたけやっている平戸市森林組合さんの事例であるとか、それから竹の集成材で、竹の循環型社会を作ろうっていう TEORI さんというメーカーさんの話であるとか、それからヒノキのおがくずを使ってシックオフィスやシックハウスを起こさない健康ひのき畳を作っている飛騨フォレストさんのお話しですとか。資料を用意していますので、またこの辺に関してのご質問等はメールを通していただければと思います。

すいません、駆け足ですが話題提供とさせていただきます。このあと、皆さんが主役ですので活発なご意見をいただければというふうに思います。

よろしく願います。